

〈共同研究報告〉

関西福祉科学大学における英語教育について

永田 節子*, 山内 彰**,
松本 明美***, 山本 芳孝****

A General Survey of English Language Learning in Kansai University of Welfare Sciences

Setsuko Nagata, Akira Yamauchi,
Akemi Matsumoto and Yoshitaka Yamamoto

要旨：今回の調査は関西福祉科学大学における英語教育に関する実態を調査する目的で行われた。英語試験はリスニング、文法、読解から構成されており、その試験結果を分野別、学年・学科別に分析している。英語学習に関するアンケートは20問で構成されており、その集計結果を学年・学科別に分析している。この研究は平成19年度共同研究指定に基づき行われたものである。

Abstract : An English language test and survey examining attitudes toward English language learning were carried out on 1118 students of Kansai University of Welfare Sciences in December 2007. The test included listening, vocabulary, grammar, and reading sections. The survey consisted of 20 questions examining the students' attitudes towards learning English. The results of the test and the survey show that each department and grade has its own unique characteristics.

Key words : 英語教育 English Language Learning 多言語・多文化 Multilingual and Multicultural Society ワールドイングリッシュ World English

I 序 文

今回の調査は関西福祉科学大学における英語教育に関する実態を調査する目的で実施された。調査は一般教育の英語を受講する全学部全学科の1年生と2年生1099名及び再履修生27名を対象に英語運用能力の分析と英語に関するアンケート調査を実施した。そしてアンケート

回収総数1年生と2年生1095名、及び再履修生23名の分析を行った。なおアンケートは「わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究－学生編－」¹⁾「大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究（Ⅱ）－学生の立場－」²⁾「わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究」³⁾を参考にしている。

本報告書は2007年12月におこなわれた英語

*関西福祉科学大学健康福祉学部 教授（共同研究代表者）

**関西福祉科学大学社会福祉学部 講師

***関西福祉科学大学健康福祉学部 講師

****関西福祉科学大学社会福祉学部 教授

表1 被験者の内訳

No.	カテゴリ	件数	全体%	除無回答%
1	1年生：社会福祉学科	257	23.0	23.0
2	1年生：臨床心理学科	113	10.1	10.1
3	1年生：健康科学科	102	9.1	9.1
4	1年生：福祉栄養学科	82	7.3	7.3
5	2年生：社会福祉学科	261	23.3	23.3
6	2年生：臨床心理学科	117	10.5	10.5
7	2年生：健康科学科	96	8.6	8.6
8	2年生：福祉栄養学科	67	6.0	6.0
9	再履修	23	2.1	2.1
	無回答	0	0.0	
	合計	1118	100%	100%

試験とアンケート調査を分析したものである。英語試験はリスニング、文法、読解から構成され、回答を選択肢のなかから選ぶマークシート形式のものを使用し、それぞれの分野別のスコア結果と学年・学科別のスコア結果の分析をおこなっている。アンケートは20問で構成されており、それぞれの選択肢を選んだ回答の単純、学年・学科別、学年別集計をおこない、報告書として学年・学科別のアンケート結果を分

析したグラフを掲載しコメントをつけた。コメントをつけるにあたっては紙面の関係からアンケート分析を一部省略せざるを得なかった。

1118名の内訳(学年・学科・人数)は表1のとおりである。(永田)

I 学年・学科別スコア結果について

今回実施されたテストの結果について、学年別、学科別という2つの観点から分析する。

1. 学年別のスコア結果について

序文で述べたように、本学では必修科目の英語を履修している2学部4学科の1年生と2年生、そして再履修クラス(2年生と3年生以上の学年も含む)全員を対象に英語のテストを実施した。各学年のスコア平均点は、以下の表2~4のようになっている。

表2と表3から分かるように、1年生と2年生のスコア平均点はほとんど同じであることが分かる。また、それぞれの設問の平均点も1年生と2年生ではほとんど同じ点数であることも

表2 1年生のスコア平均点(学部別)

1年	スコア平均						語い		文法		リーディング		リスニング		総合																
	受験者集	語い	文法	リーディング	リスニング	総合スコア	レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数																
							1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5					
健康福祉学部	186	27	24	43	50	145	21	63	93	5	4	64	75	46	1	0	64	100	22	0	0	45	93	43	3	2	27	128	31	0	0
社会福祉学部	376	27	24	43	48	142	36	155	175	7	3	122	179	73	2	0	148	176	49	2	1	118	165	85	6	2	72	237	67	0	0

表3 2年生のスコア平均点(学部別)

2年	スコア平均						語い		文法		リーディング		リスニング		総合																
	受験者集	語い	文法	リーディング	リスニング	総合スコア	レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数																
							1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5										
健康福祉学部	164	28	24	45	50	146	17	65	75	4	3	48	78	36	1	1	55	83	24	1	1	40	83	37	3	1	25	104	34	1	0
社会福祉学部	373	27	23	44	50	144	45	132	181	6	9	150	159	62	2	0	128	195	48	2	0	96	170	100	5	2	68	229	75	1	0

表4 英語再履修スコア平均点

0年	スコア平均						語い		文法		リーディング		リスニング		総合																
	受験者集	語い	文法	リーディング	リスニング	総合スコア	レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数		レベル別人数																
							1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5										
英語再履修	27	22	19	35	43	119	9	11	7	0	0	16	9	2	0	0	15	11	1	0	0	11	13	3	0	0	12	14	1	0	0

表5 1年生の学科別スコア平均点

1年	スコア平均						語い レベル別人数					文法 レベル別人数					リーディング レベル別人数					リスニング レベル別人数					総合 レベル別人数					
	受験者集	スコア平均					総合スコア	語い					文法					リーディング					リスニング					総合				
		語い	文法	リーディング	リスニング	総合スコア		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
健康科学科	104	27	24	44	51	146	14	34	51	3	2	36	41	27	0	0	33	57	14	0	0	21	53	27	2	1	17	68	19	0	0	
社会福祉学科	261	27	24	41	48	141	28	106	119	5	3	80	128	51	2	0	114	119	27	1	0	82	116	59	2	2	49	174	38	0	0	
福祉栄養学科	82	28	24	43	49	143	7	29	42	2	2	28	34	19	1	0	31	43	8	0	0	24	40	16	1	1	10	60	12	0	0	
臨床心理学科	115	27	24	46	49	146	8	49	56	2	0	42	51	22	0	0	34	57	22	1	1	36	49	26	4	0	23	63	29	0	0	

表6 2年生の学科別スコア平均点

2年	スコア平均						語い レベル別人数					文法 レベル別人数					リーディング レベル別人数					リスニング レベル別人数					総合 レベル別人数					
	受験者集	スコア平均					総合スコア	語い					文法					リーディング					リスニング					総合				
		語い	文法	リーディング	リスニング	総合スコア		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
健康科学科	97	28	25	46	52	150	10	40	43	2	2	25	43	28	0	1	30	47	19	1	0	16	51	27	2	1	12	60	24	1	0	
社会福祉学科	260	27	22	42	49	140	39	96	116	3	6	116	101	43	0	0	102	130	27	1	0	76	115	66	3	0	59	158	43	0	0	
福祉栄養学科	67	27	23	43	47	140	7	25	32	2	1	23	35	8	1	0	25	36	5	0	1	24	32	10	1	0	13	44	10	0	0	
臨床心理学科	113	29	24	47	52	152	6	36	65	3	3	34	58	19	2	0	26	65	21	1	0	20	55	34	2	2	9	71	32	1	0	

分かる。しかし、表4の再履修クラスのスコア平均点については、1年生と2年生の平均点よりも20点以上低い。特に、「リーディング」の平均点の差が大きくなっている。

2. 学科別のスコア結果について

1年生の学科別スコア平均点は、表5のとおりである。

もっとも平均点が高かったのが、健康科学科と臨床心理学科の146点である。次に、福祉栄養学科の143点、社会福祉学科の141点となっている。それでも上位2つの学科と社会福祉学科の得点差が5点となり、それほど大きな差がないと考えられる。健康科学科については、4月の入学直後に今回と同じ形式で英語クラス分け試験を受けているので、初めて受けた他の学科よりも好結果につながったと思われる。

2年生の学科別スコア平均点は、表6のとおりである。

もっとも平均点が高かったのが、臨床心理学科の152点で、健康科学科の150点が続く。社会福祉学科と福祉栄養学科はともに140点となっている。1年生と異なる点は、平均点が高か

った学科とそうでなかった学科の点差が12点と大きくなっていることである。臨床心理学科がもっともスコア平均点が高かった理由として考えられることは、将来、大学院受験を考えている人が他の学科よりも多く、入試対策として英語に力を入れているからであろう。社会福祉学科と福祉栄養学科については、国家試験に英語が含まれないことと、一般企業を志望する人が多いからであろう。

1年生よりも2年生の方が受験時代から遠ざかっているため、スコア平均点は低くなるであろうという予想は覆された結果となったが、別の見方をすれば、2年生以上であっても、勉強の仕方によっては学生たちには、まだまだ英語力向上の可能性があることを表6（再履修生の表4を除く）が示していると考えられる。（松本）

Ⅲ 分野別スコア結果について

今回実施されたテスト結果について、語い、文法、リーディング、リスニングという分野別のスキルについて分析する。

1. 語いのスコア結果について

Ⅱの表5にあるように、学科別で語いのスコアをくらべると、1年生の場合、福祉栄養学科が28点、そのほかの3学科はいずれも27点であり、いずれの学科でもさほど違いがないといえるだろう。2年生の場合も、表6にみられるように、学科間での差は1点から2点であり、大きな違いはない。

2. 文法のスコア結果について

表2と表3からわかるように、学部ならびに学年に関係なく、文法のスコアは24点または23点であり、大きな差は認められない。ただ、表3の再履修クラスのスコアが19点であり、基本的な文法に弱いことが認められる。実際、再履修クラスでは、基礎的な文法を忘れていた学生が多く、基本に戻った文法教育が望まれるだろう。

3. リーディングのスコア結果について

表2、表3からは、リーディングについて学部での差はあまり認められない。ただし、表4の特に2年生の学科別のデータからはやや差があることが伺える。社会福祉学科は42点であるのに対し、臨床心理学科は47点であり、リーディングについてある程度の差があいていることがわかる。臨床心理学科では、演習などで英語の論文や本の一部を使用することもあるため、一定の英語にかんする読解力が養成されているのではないと思われる。

4. リスニングのスコア結果について

学部については、表2にあるように、1年生の健康福祉学部が50点であり、社会福祉学部は48点である。ただし、2年生については、表3に示されているとおり、どちらの学部も50点であり、差異は認められない。学科別では、表5にあるように、1年生の場合、健康科学科が一番高く、51点で、社会福祉学科が一番低く、48点であった。2年生についてみても

と、表6に示されているように、一番高いスコアをだしたのが健康科学科と臨床心理学科の52点であり、一番低かったのが福祉栄養学科の47点であった。リスニングは実技的な技能であり、国際交流やグローバル化、多文化交流などに興味があり、相応の練習をしている場合に高いスコアが出るのに対し、たとえば英語以外の資格の取得といったほかの動機がよい場合には、低いスコアが出るのだと思われる。このことは、再履修クラスのスコアが43点しかないことから伺えるだろう。(山内)

Ⅳ 「英語に関するアンケート」集計分析結果

1. 大学在学中に英語を学んでおく必要があると思いますか

1. 大学在学中に英語を学んでおく必要があると思いますか

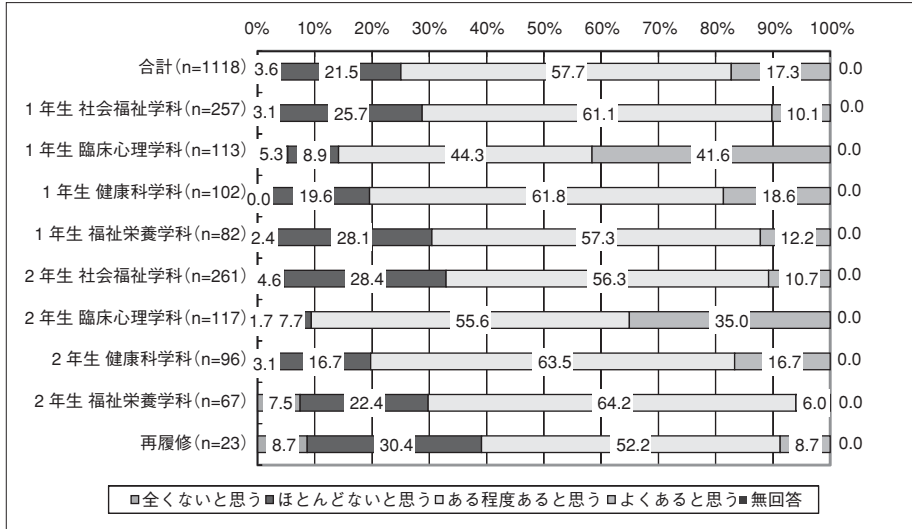


図1 在学中に英語を学んでおく必要性について

(1) 1年生と2年生との比較：在学中に英語を学んでおく必要性に関して「よくあると思う」と回答した割合が社会福祉学科を除いて3学科とも1年生から2年生になると低くなっている。臨床心理学科1年生41.6% 2年生35.0% 健康科学科1年生18.6% 2年生16.7% 福祉栄養学科1年生12.2% 2年生6.0%となっている。学生が大学で学ぶにつれて英語の必要性を認識し、そのことが自主的に語学学習に取り組む姿勢として反映されていくようになることが大切と思われる。

(2) 専門と英語の必要性への関心：在学中に英語を学んでおく必要が「全くないと思う」と「ほとんどないと思う」という回答を合わせた比率が高いのは再履修39.1%であり、社会福祉学科2年生33%、福祉栄養学科1年生30.5% 同2年生29.9% 社会福祉学科1年生28.8%と続く。社会福祉学科と福祉栄養学科におけるこの結果は、この二つの学科の専門職の国家

試験が英語と関係ないことが影響していると考えられる。記述式のアンケート結果においても英語より専門を重視する考え方がみられ、学生自身が将来における英語の必要性を認識していない現状において、英語の必要性の認識を高めることが大切である。

(3) 健康科学科1年生と他学科との比較：興味深いのは、健康科学科1年生だけ「在学中に英語を学んでおく必要が全くないと思う」という回答を選択した学生が一人もいなかったことである。図4、5、6、7も考慮に入れると、健康科学科1年生だけ実験的に2007年4月から習熟度別クラス分けをしていることが、一人一人に英語学習に取り組んでいこうとする意識を生みださせるという影響を与えているのではないと思われる。

2. 個人で英語の本や新聞、雑誌を読む機会や、手紙などを書く機会がありますか

2. 個人で英語の本や新聞、雑誌を読む機会や、手紙などを書く機会がありますか

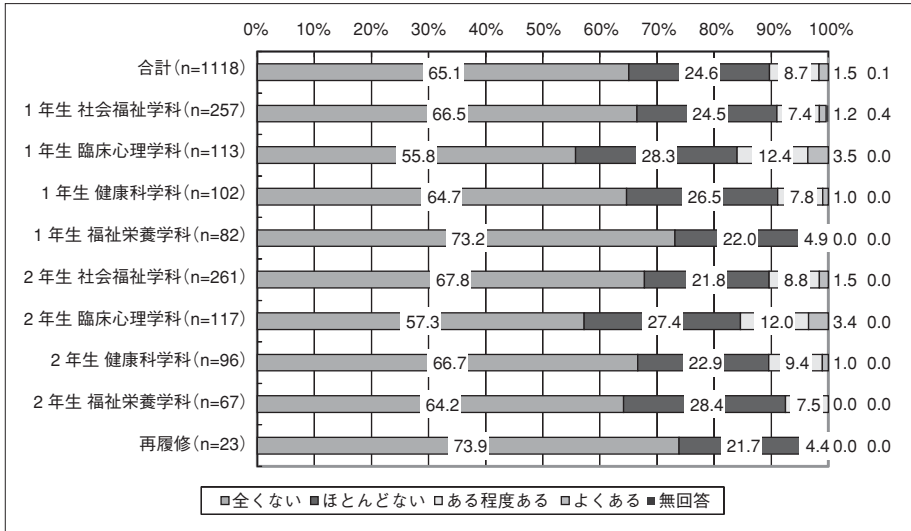


図 2 個人で英語に触れる機会について

(1) 英語に触れる機会について学科別違い：「個人で英語に触れる機会がありますか」という問いに関して、「よくある」という回答は臨床心理学科において最も多いけれども 3.4%～3.5% にとどまる。「よくある」と「ある程度ある」という回答を合計すると、臨床心理学科 1 年生 15.9% 同 2 年生 15.4% とほぼ同じで他の学科より高く、次に健康科学科 2 年生 10.4% 社会福祉学科 2 年生 10.3% 健康科学科 1 年生 8.8% 社会福祉学科 1 年生 8.6% と続き、福祉栄養学科 2 年生 7.5% 同 1 年生 4.9% 再履修 4.4% と順に減少していく。

(2) 英語に触れる機会について現在の状況：個人で英語に触れる機会が「全くない」という回答を選択した比率が高いのは再履修 73.9% 福祉栄養学科 1 年生 73.2% である。個人で英語に触れる機会が「全くない」と「ほとんどない」という回答を合計すると再履修 95.6%、福祉栄養学科 1 年生 95.2% であり、次に健康科学科 1 年生、同 2 年生、社会福祉学科 1 年生、同 2 年生、臨床心理学科 1 年生の順に減少して

いき、最後に臨床心理学科 2 年生 84.1% となる。つまり、学生全体の大多数が個人でほとんど英語に触れる機会がない状況にあるのが現状である。

(3) 学生の主体的な英語学習への取り組みの重要性について：語学という科目の性格上、学生が個人個人の興味に応じてもっと主体的に英語に関わりを持つ機会を増やす必要があり、学生が英語の必要性を認識し、各自の興味に応じて何らかの形で少しずつでも英語に触れる機会を増やしていくことができるような環境を整えていく必要がある。(永田)

3. 一般教育の英語ではどの技能を最も重点的に伸ばしたいと思いますか

3. 一般教育の英語ではどの技能を最も重点的に伸ばしたいと思いますか

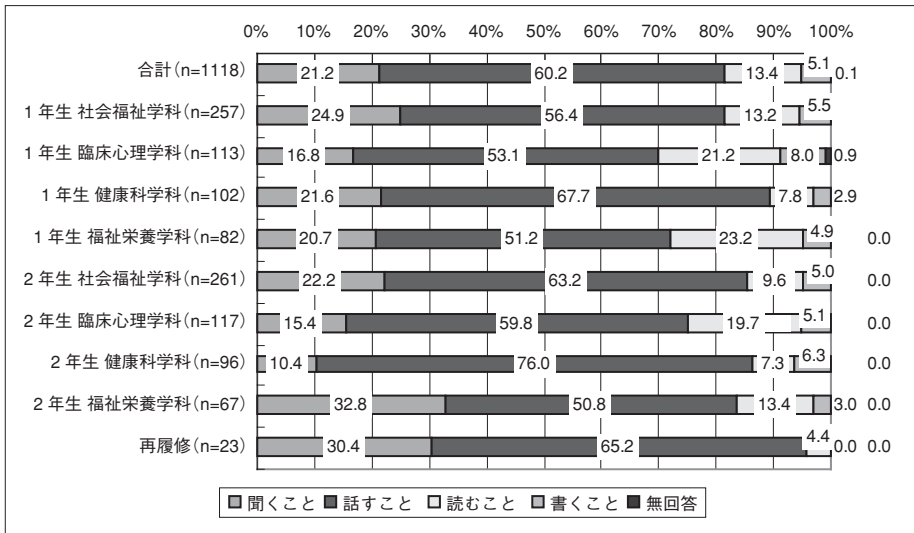


図3 英語で最も伸ばしたい技能

(1) 「話すこと」を重視：一般教育の英語では、英語を「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の技能のうち、どれを最も重点的に伸ばしたいか質問したところ、すべての学科学年で「話すこと」を選んだ人が最も多く、50%を上回っていた。この結果については、国内あるいは外国で英語を話す外国人とコミュニケーションを取りたいという願望が表れていると言える。その次に多い回答が「聞くこと」である。これは、外国人とコミュニケーションを取るためには、まず相手の言うことを聞き取って理解することが重要だと考えているからだろう。また、もうひとつの理由として、将来、一般企業への就職を目指す人が、TOEICなどの検定試験を視野に入れているからだと考えられる。

(2) 特異な傾向：4学科の中で異なる傾向を見せているのが、臨床心理学科である。「話すこと」を選んだ学生がいちばん多いのは他の学科と同じだが、2番目に多い回答が「読むこと」となっている。この理由としては、この学科の

学生は大学院進学を志望する人が多く、大学院入試を突破するためには英語の試験勉強をしなければならないからである。また、心理学の英語の専門書を読む機会が多いため、学生たちは必然的に英語を読みこなさなければ内容を理解することができないと考えている。しかしながら、再履修英語のクラスでは、「読むこと」を選んだ人の数字が極めて低いのも特徴である。

(3) 問題点：英語を話すようになるためには、英語の基本的な文法や語彙を理解していることが条件だが、それらを得得するためには英語を読むなどの地道な訓練が欠かせない。本学の学生の場合、「読むこと」を選んだ学生は10%余りと少数ではあるが、「読むこと」の大切さを理解している人がわずかながらでもいることは救いであろう。

4. 聞くことについて 大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか

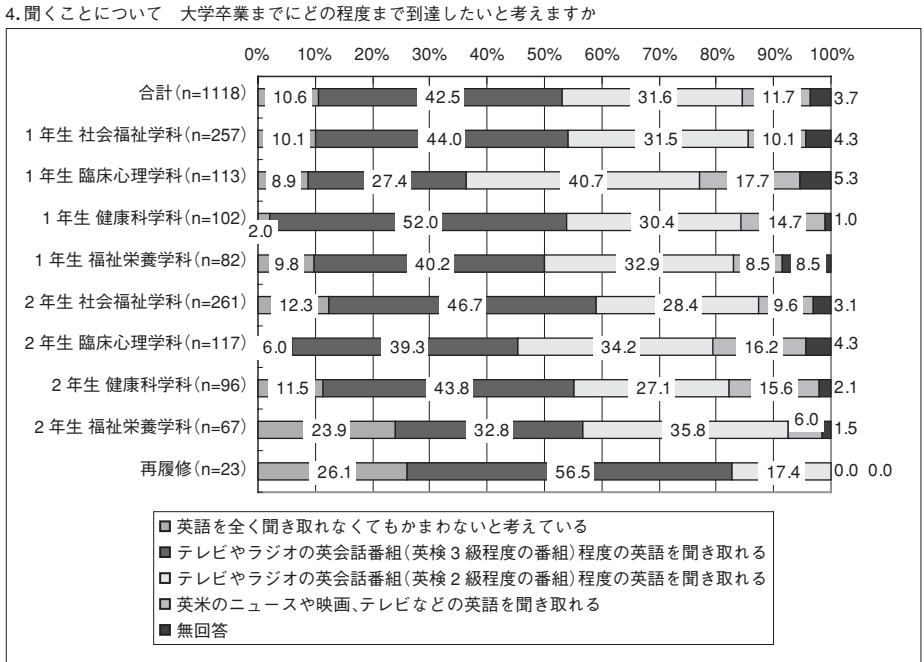


図 4 聞くことについてどの程度まで到達したいか

(1) 到達レベル：聞くことについて、大学卒業までにどの程度まで到達したいかを質問したところ、すべての学科、学年で「英検 3 級程度」の「テレビやラジオの英会話番組」を聞き取りたいと回答している。その次に多い「英検 2 級程度」の聞き取りレベルと合わせると、すべての学科において 80% ほどの数字に達している。このことから、学生たちは日常会話に困らない程度のリスニング力を付けたいと考えていることが分かる。さらに、「英米のニュースや映画、テレビなど」を聞き取れる高度なリスニング力を望む、志の高い学生も多いことが伺える。実際、英語を聞き取る力はずぐには伸びないので、学生たちが苦手とする技能のひとつだが、学習して力をつけたいと考えていることがよく分かる。

(2) 「全く聞き取れなくてもかまわない」と考える理由：しかしながら、健康科学科 1 年生を

除いては、「英語を全く聞き取れなくてもかまわないと考えている」学生の割合が高いことも無視できない。特に、福祉栄養学科の 2 年生と再履修クラスにおいてこの数字が高く出ている。再履修クラスについては、4 分の 1 以上の学生が「英語を全く聞き取れなくてもかまわない」と回答している。福祉栄養学科の場合は、管理栄養士などの職業を目指していて将来の目標が定まってきていることも背景にあるだろう。そのため、高度な英語力をつけるエネルギーを注ぐ必要がないと学生たちは考えていると言える。再履修クラスの場合は、英語の苦手な人が多く存在していることも関係がある。

5. 話すことについて 大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか

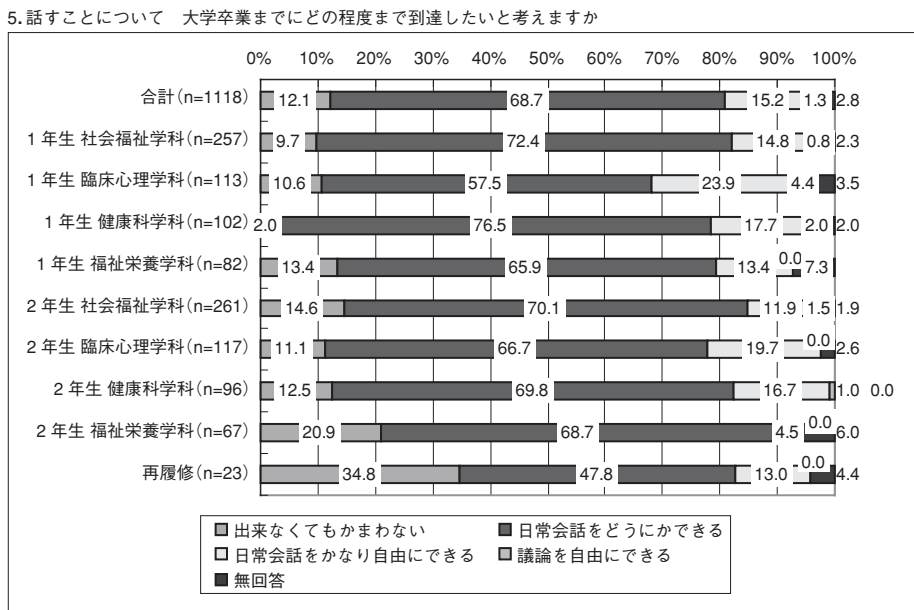


図5 話すことについてどの程度まで到達したいか

(1) 到達レベル：話すことについて、大学卒業までにどの程度まで到達したいかを質問した。その結果、図5のようにすべての学科、学年で約70%が「日常会話をどうにかできる」程度まで到達したいと考えている。これは、前節4の「聞くことについて」のアンケート結果と関係しているように、国内あるいは外国でコミュニケーションに困らない程度の会話力を求めていることの流れである。さらに「日常会話をかなり自由に」話す力まで到達したいと考える人も多いが、「議論を自由にできる」ほどの高度なコミュニケーション能力までは必要としないことも分かる。

(2) 「出来なくてもかまわない」と考える理由：しかしながら、健康科学科1年生を除いて、「出来なくてもかまわない」と答えた人が各学科学年の約10%もいる。さらに、前節4のアンケート結果同様、福祉栄養学科2年生と再履修クラスにおいては、「出来なくてもかま

わない」と答えた人の割合が高い。再履修クラスでは3分の1の人が「出来なくてもかまわない」と答えている。この結果については、前節4のところでも分析したように、再履修クラスでは、英語の苦手な人ほど英語学習に消極的なことが伺える。(松本)

6. 読むことについて、大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか

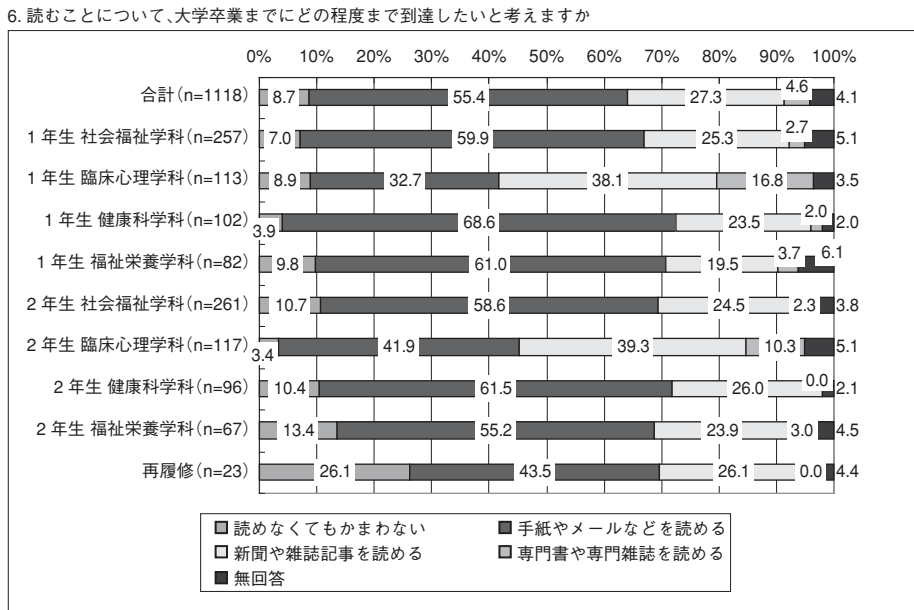


図 6 読むことについて、大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか

「読むことについて、大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか」というアンケート項目についての回答は、図 6 のようになっている。

(1) 合計でみれば分かるように、「読めなくてもかまわない」と考える者は再履修のクラスで 26.1% とやや多いものの、ほとんどのクラスならびに学年で低い数値になっている。

(2) 「手紙やメールなどを読める」とした者の割合が、ほとんどのクラスで 60% 以上になっている。1 年生の臨床心理学科のみ 32.7% と低いが、これは読めなくてもよいと考えているからではなく、「新聞や雑誌記事を読める」という程度まで必要と考えているからである。また、「専門書や専門雑誌を読める」レベルまで必要だと考えている学生が多いのも、臨床心理学科の特徴といえよう。こうした反応が返ってくるのは、おそらく、大学院の臨床心理士のコースへと進みたいと考えている学生がいるた

め、高度な英語の読解スキルが必要になるからであろう。

7. 書くことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えるか

7. 書くことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えるか

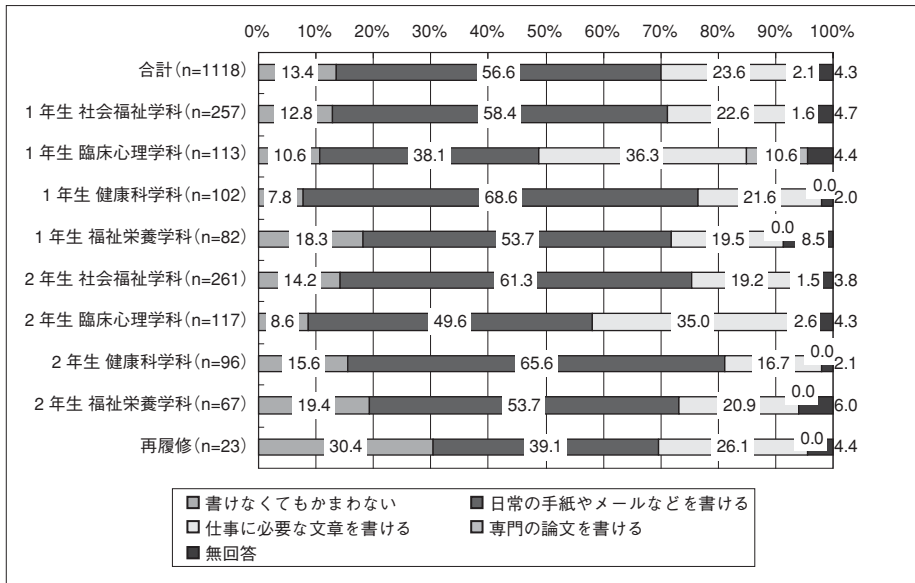


図7 書くことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えるか

(1) 英語を書くということについての関心を調べてみると、「日常の手紙やメールなどを書ける」レベルくらいまで学習したいという学生がほぼ過半数を占めている。

これは、おそらく、インターネットやグローバル化が進行するなかで、メールなど海外からの情報が英語で受信される場合も多く、そうした事態に対応し、かつ、できればこちらからもある程度の内容を発信したいという心理によるものであろう。

(2) 臨床心理学科の学生は、さらに1つ上のレベルである「仕事に必要な文章を書ける」を目標にしたいと答える学生が多い。また、同学科の1年生では特に「専門の論文を書ける」という相当高いレベルを目指す者もあり、大学院や研究職を念頭においての回答だと考えられる。

8. 高校時代、英語を好きでしたか

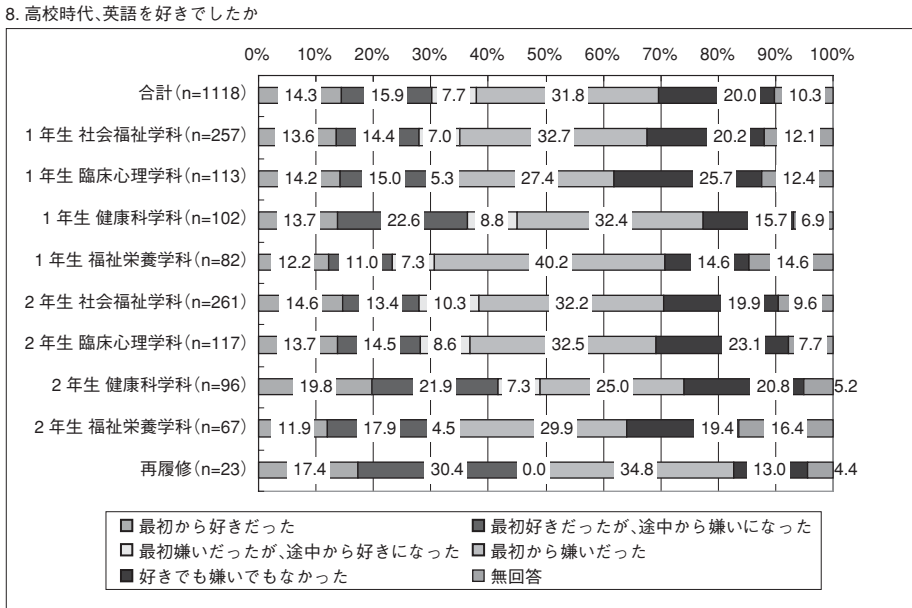


図 8 高校時代、英語を好きでしたか

「高校時代、英語を好きでしたか」という問いについては、「最初から好きだった」と答える学生の割合が、紀要の中では省略されているが、中学時代に好きだったかどうかというアンケート結果と比べてみると、顕著に落ちていることがわかる。また、「最初から嫌いだった」という割合が、同じように中学時代と比べると著しく増えている。高校時代に関してみると、「最初好きだったが、途中から嫌いになった」と「最初から嫌いだった」をあわせると、全体で 47.7% になる。特に、福祉栄養学科の 1 年生では、「最初から嫌いだった」と答える人の割合が、40.2% というきわめて高いレベルにある。

このことからすると、中学時代には英語が好きまたは肯定的だった学生も、高校時代になると嫌いまたは苦手という意識に変わっていったのだと思われる。その原因が何なのかはこの調査からは判然とはしないが、受験英語へと質的

に変化する点や、語彙数などが一挙に増え、暗記事項が増大するといった点が原因にあるだろうと推定される。(山内)

V 本学学生の課題

一 習熟度別クラス編成について

課題となるのが、現在もみられる英語力の差が今後広がっていくことへの懸念である。英語に興味を持ち、学習意欲の高い学生の英語力を伸ばす必要がある。また、英語力に差のある学生が授業において求めるものは多様化してきており、学生一人一人が授業内容に対して満足感を持てるようにしていくことが求められている。

健康科学科における習熟度別クラス分けを実施した結果についての報告を付け加え、本学における英語教育の今後の課題を探ってみたい。

現在、実験的に2007年4月入学以降の健康科学科学生にのみ習熟度別クラスが導入されている。このような形式のクラス分けの結果について学生、担当教員に2007年7月にアンケートをおこなった。この結果からみると満足度は成績評価の最上のクラス以外は非常に高く、この3つのクラスについては習熟度別クラス分けに関して不満とする意見は一つもない。英語の苦手意識が強かった学生ほど「安心して授業を受けられる」といった評価、満足度が高くなっている。英語力の最も高いと分類されたクラスでの不満というのは「できるクラスにいると成績評価において不利である」「そんなに英語が得意なわけではない」といった不安の声がある。ついでながら、7月にこのアンケートを行った時点ではまだ成績評価はおこなわれていない。担当教員を対象にしておこなった習熟度別クラス分けを実施した結果に関してのアンケートは、すべての担当教員に好評という結果となり「授業の方針が立てやすい」「教材を選びやすくなった」という感想がみられる。

習熟度別クラス分けをおこなったからといってすぐに目に見えて英語力が向上するというわけではない。しかしながら、「英語に関するアンケート」IV-1の「大学在学中に英語を学んでおく必要があると思いますか」という質問に

対して、「全くないと思う」と「ほとんどないと思う」という回答をあわせると健康科学科1年生、2年生ともに約20%となるが、「全くないと思う」という回答を選択した学生がゼロというのは健康科学科の習熟度別クラス分けが実施された1年生だけであり、ほんのわずかながら他学科や同じ学科内でも2年生とのちがいがみられる。また、IV-4「聞くことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか」と、IV-5「話すことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか」に対する回答においても、「出来なくてもかまわない」という回答を選択した学生の比率を比較するならば、健康科学科の習熟度別クラス分けが実施された1年生は他学科や同じ学科の2年生と比べて極めて低い結果となっている。具体的に数字を挙げて健康科学科1年生と2年生を比較すれば、「聞くことについて」1年生2.0% 2年生11.5%、「話すことについて」1年生2.0% 2年生12.5%の学生が「出来なくてもかまわない」と考えていることになる。

同様に、IV-6「読むことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか」という問いに対し「読めなくてもかまわない」という回答を選択した比率は、健康科学科1年生は3.9%であり同じ学科の2年生10.4%よりも低くなっている。同様に、IV-7の「書くことについて大学卒業までにどの程度まで到達したいと考えますか」という問いに対して、「書けなくてもかまわない」という回答を選択した比率は、健康科学科1年生が7.8%であり全学科において最も低く、次に臨床心理学科2年生8.6%と続き、健康科学科2年生は15.6%となっている。

このようなアンケート結果から、習熟度別クラス分けが4月より実施された健康科学科1年生は、他学科や同じ学科の2年生と比べて英語学習への取り組みに否定的な姿勢を取る学生が少ないということが指摘できる。

健康科学科1年生と2年生とをアンケート結

果のⅣ-8の「高校時代、英語を好きでしたか」という問いに関して比較すれば、高校時代に英語を「好き」と「途中から好きになった」という回答の合計は1年生22.5% 2年生27.1%であり、「嫌い」「途中から嫌いになった」という回答は1年生55% 2年生46.9%となっている。大学入学時において1年生の方が英語を好きな比率が少し低く、また英語を嫌う比率がかなり高かったことを考慮に入ると、大学入学後における英語学習に関する意識調査において、1年生は2年生より英語を学習することに対して否定的・消極的な考え方をする学生が少ないというアンケート結果は興味深いものとなっている。

習熟度別クラスで学んできた学生が英語学習に関して予習をあまりしていないというアンケート結果となっており、習熟度別クラス分けテストが実施された2007年4月と12月の成績結果を比較して変化がみられるわけではない。また、習熟度別クラスで学んできた1年生が他学科や健康科学科の2年生と比べて成績に違いがみられるわけではない。しかしながら、習熟度別クラスで学んできた学生には少しではあるけれども英語学習への取り組みに前向きな姿勢がみられる。

Ⅵ 英語教育の一般的課題

2002年夏、文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の算定について—英語力・国語力増進プラン—』が発表された。大学で英語など特に履修しなくても専門書を読み論文や発表も英語でこなす学生たちと、大学でアルファベットからやり直す学生たちとに二分化されてくることになるだろうという予想がなされている。これまでもこのような現実があったけれども、この傾向はますます強くなると思われる。高度な英語力のある学生は各自の専門分野別英語の運用能力を求め、学生それぞれが英語の授業に求めるものはますます多様化すると予想される。世界における語学教育への捉

え方にも近年少しずつ変化が表れてきている。イギリスやアメリカ、ヨーロッパ連合(EU)諸国の最近の状況について次のような指摘がなされている。

いわゆる「国際語」を母語にもつイギリスでは、長年にわたって外国語教育の必要を感じてこなかった。ところが、近年にいたって、かつてないほどに国をあげて外国語の教育に力を入れ始めた。長年、英語同化政策をとってきたアメリカもまた、外国語教育に不熱心な国のひとつであった。ところが、1968年に2言語教育法を制定し、建国以来の「英語」単一言語政策を法的に否定し、多言語・多文化国家に向けて国内言語政策の大転換をおこなった。

ヨーロッパ連合(EU)における「リングア計画」は、ヨーロッパ統合実現のために必要不可欠の言語教育計画であるけれども、統合ヨーロッパのすべての市民がハイスクール卒業までに、少なくとも母語以外にさらに2つの言語を身につけようとするものである。

最近では‘Victory of English’ということが、さも当然のここのようにいわれる。しかしながら、言語・文化的多様性を積極的に認めようとする新しい動きがある。長い間、言語に関しては、途上国は先進国の言語を学び、小国は大国の言語を学び、地方は中央の言語を学ぶことが当然のことと考えられてきていた。いまヨーロッパでは、言語は「垂直に上から下へ流れる」ものではなく、むしろ「水平に相互に流れあう」ものであるという新しい考え方に基づいている。これはこうした考え方が、国際的に公式に認められたことを意味する。これは、実は、人類史の上で見落とすことができない画期的な出来事である⁴⁾。

現在、様々な言語が必要とされる傾向は、福祉の現場、学校、病院、会社など職場や日々の生活の場にもすでにみられる。しかしながら同時に、そのような時代であるからこそ、英語を

世界の共通言語として捉えようとする考え方が少しずつ普及してきている。世界の英語として地域別にすれば、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、アジア英語、アフリカ英語、ヨーロッパ英語と大別されている。そして最近はそのような英語 **World English** を複数形でとらえる立場が一般化してきている。**World English** とは何かということについてごく簡単な紹介は以下のようなものである。

今や、英語は国際共通語である。人間の交流が盛んになれば、なんらかの言語に共通語の役割を担ってもらわなければならない。それが現在では英語であるというだけの話である。外国語として英語を習った者同士が、お互いにちょっぴりずれた発音と文法でやりとりする。これが **World English** だ。**World English** は複数形である⁵⁾。

現代はグローバル化した社会であり、時代の変化も激しく生涯教育の重要性が語られているが語学学習も例外ではない。学生が生涯自身で学び続けていくことができるようにすることが重要である。その為にともかくまず学生に必要とされるのは語学学習に取り組んでいこうとする動機づけである。学生が語学の授業内だけでなく、大学の講義や実習、学外の活動などのなかで専門だけでなく語学学習の必要性に関しても認識を高めていくことができるのが理想である。学生自身のなかに英語学習への何らかの動機づけがなければ日々の地道な作業は生まれないうし、何らかの思いを抱いて自ら取り組むのでなければ、語学学習は続かず、成果も上がらない。学生それぞれが英語の必要性を認識し、興味を持って取り組むという姿勢を養っていきながら、英語に興味や関心のある学生はさらにその語学力を伸ばせるように、またたとえ高校までの英語教育において英語嫌いになってしまった学生に対しても、将来の仕事や生活において英語を

それぞれの必要な範囲において活用していけるように、その基盤となるものを大学において提供していかなければならない。英語の授業内はもちろんのことであるが、学生が英語に興味と関心を持ち英語に触れる機会のより多い環境を整え、様々な学生の求めるものが多様化していくなかで、学生一人一人が語学学習を継続することができるように支えていくこと、学生一人一人が満足感を持てるようにしていくことが大切である。

World English が複数形で語られる現代において、学生一人一人の将来に役立つ英語力増進を行う必要があり、生涯学生自身が積極的にそれぞれの専門分野で必要とされることを学び続け実践していくことができるように、その重要な一助となる英語力を向上させていくことができるような基盤を大学時代に作りあげることが求められている。

注

- 1) 大学英語教育学会実態調査委員会「わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究－学生編－」平成 19 年 3 月発行
- 2) 大学一般英語教育実態調査研究会代表小池生夫 研究成果報告書「大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究 (II)－学生の立場－」昭和 60 年 3 月
- 3) 研究代表小池生夫 研究成果報告書「わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究」 「職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究」別冊 平成 2 年
- 4) 大谷泰昭「諸外国の外国語教育からの示唆」英語教育 Vol. 54. No. 12 2006 年 2 月
- 5) 黒田龍之助「World English はどんな言語になるか」英語教育 Vol. 53 No. 11 2005 年 1 月
(永田)

調査を実施するにあたり、12 月上旬に英語試験とアンケート実施のためご協力をいただきました英語教育を担当する全教員と、本学 1 年生、2 年生、再履修生計 1126 人の学生の皆さんに感謝いたします。